



学 位 論 文 審 査 結 果 要 旨	主査：看護学分野教授 齋藤美華 副査：作業療法学分野教授 佐藤寿晃 副査：看護学分野教授 安保寛明
	<p><b>新規性・有効性</b></p> <p>超高齢社会に伴い、介護老人保健施設における看護職への期待は高まっているが、一方で、看護職の離職率は高いという課題がある。この研究では、介護老人保健施設に勤務する看護職の職場に向き合う肯定的な感情であるワーク・エンゲイジメントに着目し、看護職の役割認識との関連、役割ストレスと組織要因への影響、さらに、介護職からみた看護職の役割との関連について明らかにしている。これまで、老人保健施設の看護職を対象に各要因との関連を検証したものは存在しないため新規性が高い。さらに、役割ストレスについて、その概念を役割葛藤、役割の曖昧さに分けて検証し、ワーク・エンゲイジメントとの効果の関係性について示した点においても新規性が高い。結果において、看護職が高齢者の生活背景を理解した関わりを行うことで看護職自身のワーク・エンゲイジメントを向上させるだけでなく、在宅復帰支援も含め看護職としての役割を果たすことが介護職のワーク・エンゲイジメントをも向上させることを示唆した点において有効性が高い。</p> <p><b>信頼性</b></p> <p>この研究では、主要調査項目であるワーク・エンゲイジメントには信頼性・適合性の得られている尺度を、役割葛藤と役割の曖昧さには、信頼性・妥当性が検証されている尺度を使用して検証している。さらに、対象者の選定および対象者数、調査方法など適正な手続きを経て得られたデータに基づいており、データの信頼性を担保できている。統計学的な分析については、適切な手法を選択しており、信頼性が担保できている。</p> <p><b>総評</b></p> <p>この研究は、介護職も含めた環境づくりが高齢者の生活の理解につながり、看護職の役割ストレスの軽減に寄与するのみならず看護介護職の双方の離職防止に結びつく可能性を示しており、多職種が協働する組織構築に寄与する研究である。</p> <p>審査委員は、論文構成、背景の整理、問題設定、結果、考察、引用文献の適切性について慎重に検証し、博士論文として適切な水準に至っていることを確認した。本論文は博士論文に値する内容であると評価し、一致して、学位論文審査および最終試験に合格したと判断した。</p>